SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

古墳時代後期の東駿河の様相：埋葬施設からみる特徴

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊地, 吉修 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/6715

第3回

古墳時代後期の東駿河の様相

――埋葬施設からみる特徴――

菊池　吉修

はじめに

この公開講座では、篠原先生が弥生時代、滝沢先生と私が古墳時代についてお話をしますが、本題に入る前に、本日の講座で私がお話しする「古墳時代後期」と「東駿河」の範囲について、簡単に説明します。

「古墳時代」といった場合、三世紀後半から六世紀代を指すことが一般的です。ただし、近年は古墳時代の始まりはもう少し遡るという意見もあります。また、古墳時代の終わりについても、もう少し遅い、七世紀代までを含める場合もあります。七世紀代は、飛鳥時代とも呼ばれ、律令国家への移行が見られる時期です。しかし、依然として古墳が造られ続けられる地域も多くあります。静岡県もその一つであり、七世紀代に至っても古墳の規模や副葬品等に当時の社会状況などが如実に反映されています。そこで、ここでは、この時期までを「古墳時代」として扱うことにします。

さて、短くみても三世紀半、長くみれば約五世紀にわたって続く「古墳時代」ですが、初めから終わりまで、その様

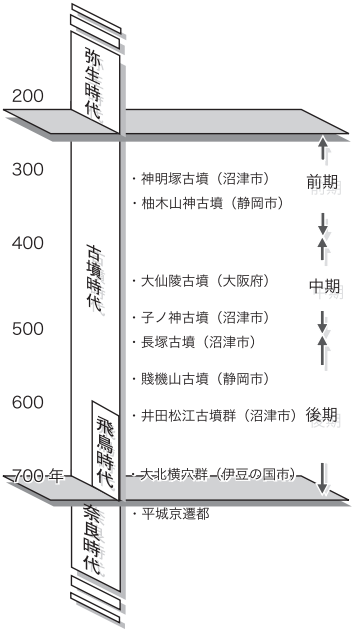


図1　古墳とその時代

相が一様であった訳ではありません。副葬品の内容や、埋葬施設の状況などから、幾つかの時期に細分されることがあります。一般的には三時期に区分されますが、この場合、概ね四世紀代までを古墳時代前期、五世紀代を古墳時代中期、六世紀代以降を古墳時代後期と呼称します。（図1）。

次に取り扱う地域ですが、ここでは、静岡市の「薩埵峠」から三島市と清水町の境の「境川」までを「東駿河」と呼ぶことにします。もっとも、「東駿河」のことを理解するためには、隣接地である「伊豆」及び「西駿河」との対比が必要になります。そこで両隣の地域と比較しながら話を進めていくことにします。

つまり、今回の講座では六世紀から七世紀代における「駿河」・「伊豆」という現在の静岡県東半の様子を概観しながら、その中で「東駿河」がどのような特徴を持った地域であるか、お話をします。なお、「伊豆国」は六八〇年に駿河から分置されるので、「伊豆」は今回扱う六～七世紀においては駿河の一部であったといえます。

前期～中期の古墳と後期の古墳

ところで、「古墳」と言った場合、イメージに浮かぶのは、大阪府の大仙陵古墳や誉田御廟山古墳、あるいは奈良県の箸墓古墳などの大きな前方後円墳でしょうか。これらの一般的に紹介される巨大な前方後円墳のほとんどは、前期～中期につくられる古墳です。静岡県を代表する全長約百十メートルの磐田市堂山古墳は中期、静岡市の柚木山神古墳は前期の前方後円墳です。

それでは、後期の代表的な古墳といいますと、まずあげられるのは、奈良県の藤ノ木古墳でしょうか。この古墳は二〇年ほど前に話題になったのでご存じの方も多いかと思います。静岡県内では静岡市の賤機山古墳が古墳時代後期を代表する古墳といえます。この二つの古墳は、前方後円墳ではなく、円墳です。

古墳時代後期にも前方後円墳は存在します。ただし、全国的にみても中期に比べると大型の前方後円墳は少なくなり、築造数も減少していきます。そして六世紀から七世紀

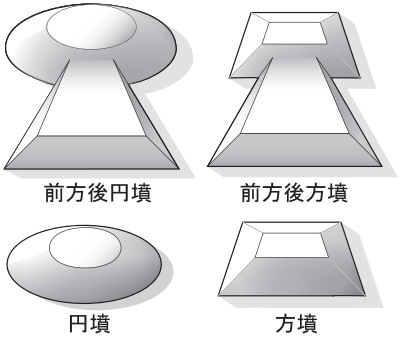


図2　古墳のかたち

に移行するころ、前方後円墳の築造は終焉を迎えます。つまり、古墳時代後期は前方後円墳が造られる最後の時期といえます。なお、古墳時代後期になると前方後円墳が小型化する一方で、これまで前方後円墳がみられなかった地域にも造られるようになります。駿河の場合、藤枝市を中心とした志太地域、静岡市の安倍川西岸などが典型例であり、伊豆の国市の駒形一号墳もその例といえます。

古墳の分布については、もう一つの特徴が後期の古墳にはあります。それは、一定の範囲に非常に密集して古墳が造られることです。図3は沼津市の石川古墳群ですが、白い点は全て古墳

図3　石川古墳群の古墳分布

です。このような古墳の集まりを、一定範囲に「群れ」「集まる」「古墳」であることから「群集墳」と呼びます。そしてこのような群集墳が各地に形成されることが古墳時代後期の特徴の一つです。

前方後円墳が小型化し、やがて消滅していくいっぽうで、このような古墳群が多数形成されます。そのため古墳の築造数でみると、後期の古墳は前期・中期の古墳の合計よりも多く、古墳時代を通じて最も多くの古墳が造られる時代ともいえます。図4は前期・中期の古墳の分布、図5は後期の古墳の分布ですが、前方後円墳の分布域、古墳の築造数の違いがわかるかと思います。

古墳の分布状況の違いに加え、古墳時代後期には、もう一つ大きな変化が現れます。それは、埋葬施設です。埋葬施設というのは、死者を埋葬するための施設のことですが、前期から中期の古墳で一般的にみられるのは、「竪穴系」と呼ばれる埋葬施設です。いっぽう、後期の古墳においては「横穴系」と呼ばれる埋葬施設が主流となってきます。「竪穴系」と「横穴系」の違いについては、後ほど改めて説明しますが、後期の古墳は前期と違った埋葬施設が主流になります。

以上をまとめると、古墳時代後期の特徴としては次の三点が指摘できます。一つは、前方後円墳が造られる最後の

時代、二つ目は、古墳時代の中でも非常に多くの古墳が密集して造られる時期、三つ目は中期とは違った埋葬施設が広まる時期、といえます。

なお、当時の社会を知るには、当時の人々が暮らしていた集落や食料・道具などを生産していた生産遺跡についても調べる必要がもちろんあります。ただし、静岡県においては、ここで取り上げる七世紀代が一番多くの古墳が造られる時期にあたり、数百基におよぶ古墳は当時の社会状況を反映していると良好な資料です。ここでは古墳、特に埋葬施設の状況から当時のこの地域について考えてみることにしましょう。

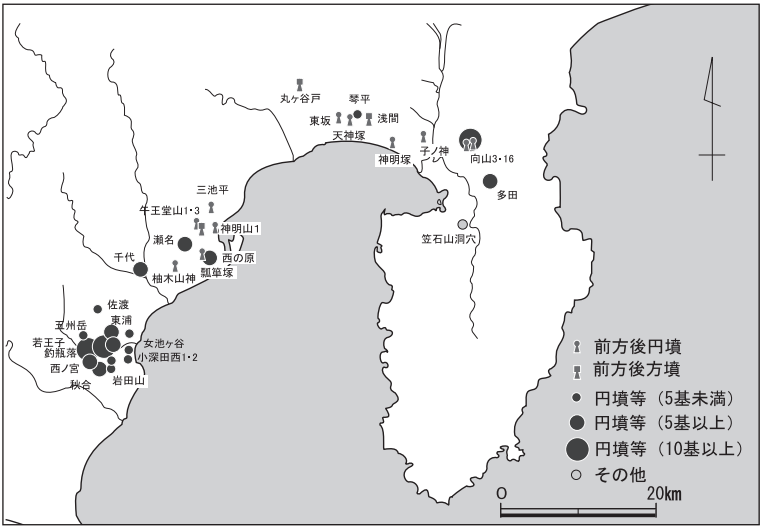


図4　古墳の分布（前期～中期）

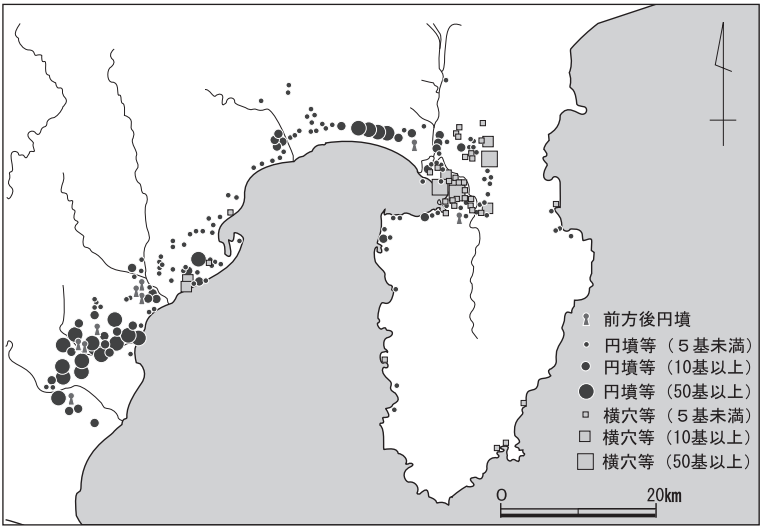


図5　古墳の分布（後期）

埋葬施設から見た東駿河の特徴

†「竪穴系」と「横穴系」の埋葬施設

東駿河の古墳時代後期の様子を埋葬施設から探るにあたって、先ほど前期～中期の古墳と後期の古墳の違いで触れた「竪穴系」の埋葬施設と「横穴系」の埋葬施設の違いについて説明をします。

「竪穴系」と「横穴系」の違いは、死者を埋葬する際に古墳の中に死者をどこから葬るか、埋葬したあとその死者を埋葬した空間をどのように扱うか、そして埋葬される人数に違いがあります。

まず、死者を埋葬する際の違いですが、「竪穴系」の場合、死者は埋葬施設の上側から埋葬施設の中に安置します。死者を埋葬する空間は上部が開放されることで外部とつながることができます。いっぽう、「横穴系」においては、埋葬空間の横側に外部とつながる通路をもち、死者はここから埋葬施設に葬られます。外部とのつながりが上部にあるのが「竪穴系」の埋葬施設、横方向にあるのが「横穴系」の埋葬施設です（図6）。

つぎに、埋葬した後ですが、「竪穴系」の場合は埋葬施設を土などで被覆し、土中に埋め尽くしてしまいます。「横穴系」の埋葬施設の場合、外部と通じる通路の出入り口を石等で塞ぐだけです。

そして、埋葬される人数ですが、「竪穴系」は一人を埋葬すると埋葬施設を土等で覆ってしまうので、新たな死者を埋葬施設に入れることは困難になります。そのため基本的には一つの埋葬施設に葬られるのは一人だけです。いっぽう、「横穴系」は外部との通路を塞ぐ石等をどけることで、新たな死者を埋葬施設の中に入れることができます。一つの埋葬施設に死亡時期の異なる複数の人を葬ることができます。「竪穴系」の埋葬施設は一人のためのもの、「横穴系」の埋葬施設は複数人を葬るためのものと言い換えることができます。実際の発掘調査でも、「横穴系」の埋葬施設からは、数人分の人骨が発見される例が少なからずあります。

それでは、「竪穴系」と「横穴系」の実例を少し

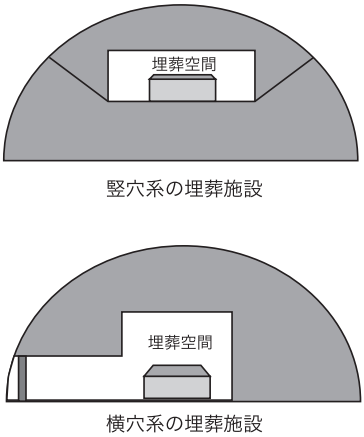


図6　古墳の断面模式図

みてみましょう。まず「竪穴系」の埋葬施設ですが、図7は藤枝市の高田観音前一号墳の埋葬施設、図8は静岡市の三池平古墳の埋葬施設です。高田観音前一号墳の埋葬施設は木棺直葬と呼ばれるタイプで、中央部に見える窪みが木棺の痕跡になりますが、墓坑（墓穴）に木棺を納めた後は、土をかぶせてしまいます。なお、木棺は長い年月を経る間に腐朽してしまい、調査で見つかったのはその痕跡のみです。

いっぽう、三池平古墳の埋葬施設は石を積み上げて作る竪穴式石室と呼ばれるものです。これも、中央部の石棺に死者を安置した後は、石棺の上方を石で覆い、さらに土で被覆してしまいます。なお、三池平古墳は前期の古墳、高田観音前一号墳は中期の古墳です。

静岡市三池平古墳（竪穴式石室）

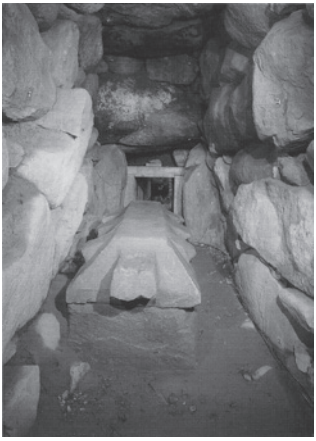
図8　竪穴系の埋葬施設二

藤枝市高田観音前一号墳（木棺直葬）

図7　竪穴系の埋葬施設一

伊豆の国市大北横穴群

図10　横穴系の埋葬施設二



静岡市賤機山古墳（横穴式石室）

図9　横穴系の埋葬施設一

いっぽうの「横穴系」の埋葬施設の例ですが、図9は静岡市の賤機山古墳の埋葬施設です。この写真は埋葬施設の中から外を見た構図ですが、奥に見えるのが埋葬施設と外部をつなぐ通路です。賤機山古墳の埋葬施設は横穴式石室と呼ばれる石を積み上げて埋葬施設を形成したもので、「横穴系」を代表する埋葬施設の一つです。

「横穴系」の埋葬施設としては、このほかに、横穴と横穴式木室と呼ばれるものがあります。横穴式石室は石を積み上げて作る埋葬施設ですが、横穴式木室は石ではなく木や粘土を使用しており、横穴は急傾斜地などの斜面に穴を穿ち埋葬施設とするものです。

共に分布は、全国的に見ても偏在性が認められます。静岡県を見ると、横穴式木室は遠江には存在しますが、駿河には存在しません。いっぽうの横穴は、駿河の一部や伊豆の一部にも存在します。図10は、伊豆の国市の大北横穴群の写真です。斜面に見える黒い部分が横穴の出入り口です。

†横穴と横穴式石室の分布

駿河・伊豆で見られる「横穴系」の埋葬施設は、横穴式石室と横穴ですが、その分布状況には特徴があります（図11）。お示ししたとおり、横穴式石室は駿河・伊豆のほぼ全域に広がっていますが、横穴は静岡市の一部と伊豆半島のつけ根付近に偏在的に分布します。

このことから、古墳時代後期の東駿河は主流となる「横穴系」の埋葬施設から、大きく二つの地域に区分できることになります。一つは、横穴式石室が急増する富士山南麓～愛鷹山南麓の地域、もう一つは横穴が盛行する江の浦周辺の地域です。

分布状況に一定の傾向を持つ横穴式石室と横穴ですが、それぞれを詳細にみると、さらなる特徴を看取することができます。

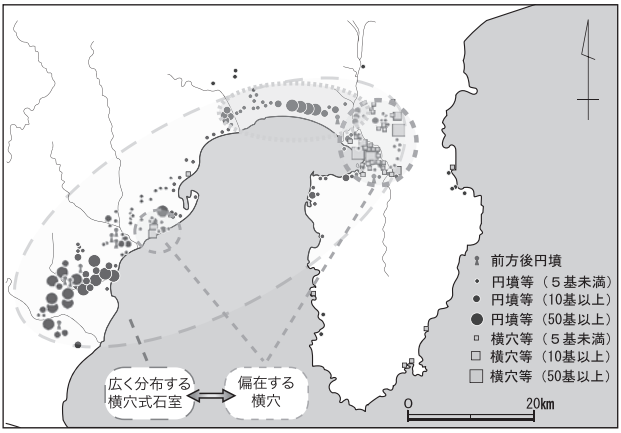


図11　横穴式石室と横穴の分布

†横穴式石室の各部名称と実測図

まず、横穴式石室から、その特徴を見ることにしますが、横穴式石室は石室の各部に様々な名称が付いています。横穴式石室の特徴に注目するには、その各部名称の理解が必要になります。また、説明の際には実測図を多用します。そこで、本題に入る前に、話を進めるにあたって必要となる各部の名称と実測図の見方について説明をすることにします。

まず、各部の名称ですが、図12は横穴式石室の模式図です。横穴式石室は死者を埋葬する場所である「玄室」と外への通路である「羨道」に大きく分かれます。「玄室」の入り口は「玄門」、「羨道」の入り口は「羨門」と呼ばれます。「羨門」は石室の入り口でもあるため、「開口部」という呼ばれ方もします。

玄室は三方を壁に囲まれた空間になっていますが、最奥部の壁は「奥壁」、両側の壁は「側壁」と呼ばれます。横穴式石室の中には「玄室」と「羨道」の幅に違いがあるものが存在します。基本的には「羨道」より「玄室」の幅が広いのですが、平面的に見た場合「玄室」の入り口である「玄門」において屈曲が生じます。この屈曲部を「袖」または「袖部」と言います。「袖」の状況は、横穴式石室を考える上で大きなポイントとなる部位です。

そして、死者を埋葬した後は、「羨道」に石を積み上げる、あるいは板状の石を使用するなどして、「玄室」を塞いでしまいます。この塞いでしまう部分を「閉塞部」と呼び、閉塞に使用される石材を「閉塞石」と呼びます。

次に、実測図の見方を説明します。図13は、静岡市の賤機山古墳の横穴式石室の図面ですが、①は横穴式石室の床面直上を真上から見た図で、「平面図」とも言います。上が奥壁側、下が開口部側となる図が一般的です。②は横穴式石室の内側から奥壁を見た図です。輪郭として記されているのは奥壁手前付近でみた石室の横断面の図です。③は横

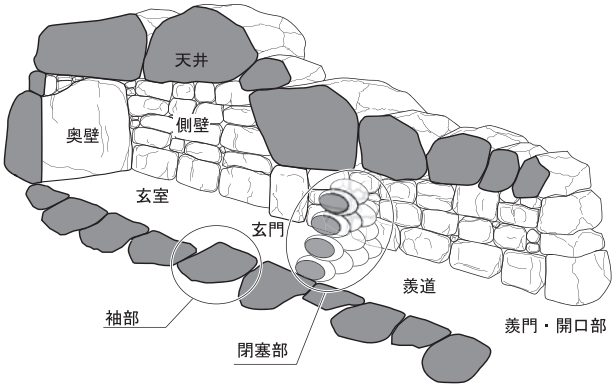


図12　横穴式石室の各部名称

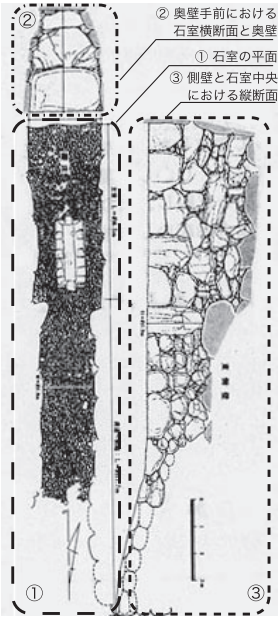


図13　実測図の見方

穴式石室の中から側壁を見た図です。輪郭として描かれるのは、石室中央部における石室の縦断面図です。なお、この図では、入り口側から奥壁を見た場合の右側の側壁のみが示されていますが、平面図を挟んで左右両側壁が対照に示さる場合が一般的です。

†「袖」を持つ石室と持たない石室

それでは、横穴式石室の特徴から東駿河の様子を探っていきましょう。横穴式石室は、先ほど説明したとおり、各部に名称がついていますが、その各部の差異から形態分類が行われます。その際、特に注目されるのは「石室の平面形」や「天井の構造」、「床面の構造」、「袖の構造」です。中でも「袖の構造の違い」は多くの研究者が着目する分類要素で、その形状から「両袖式」の石室、「片袖式」の石室、そして袖を持たない「無袖」の石室に分類されます（図14）。

このうち、「両袖式」は、羨道幅に対し玄室の幅が広く、羨道から玄室を見ると、両方の側壁が屈曲し広がる形態です。「片袖式」も羨道幅に対し玄室の幅が広いのですが、羨道から玄室を見た場合、左右の側壁のどちらかのみが屈曲し広がる形態です。「無袖」は羨道幅と玄室幅の差がないため、側壁に屈曲する部位を持たないタイプです。このほか、東海地方には「擬似両袖式」と呼ばれるタイプが存在します。「擬似両袖式」は羨道と玄室の幅に差が無く、平面形を一見すると「無袖」に見えますが、両側の側壁を見ると玄室と羨道の境に立柱石と呼ばれる縦長の石材を配し、玄室と羨道の区分としているタイプです。

この四種の石室は、いずれも静岡県の東半の地域に存在しますが、その分布状況には特徴があります。

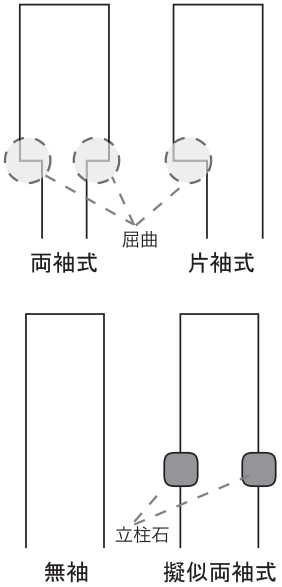


図14　石室の形態

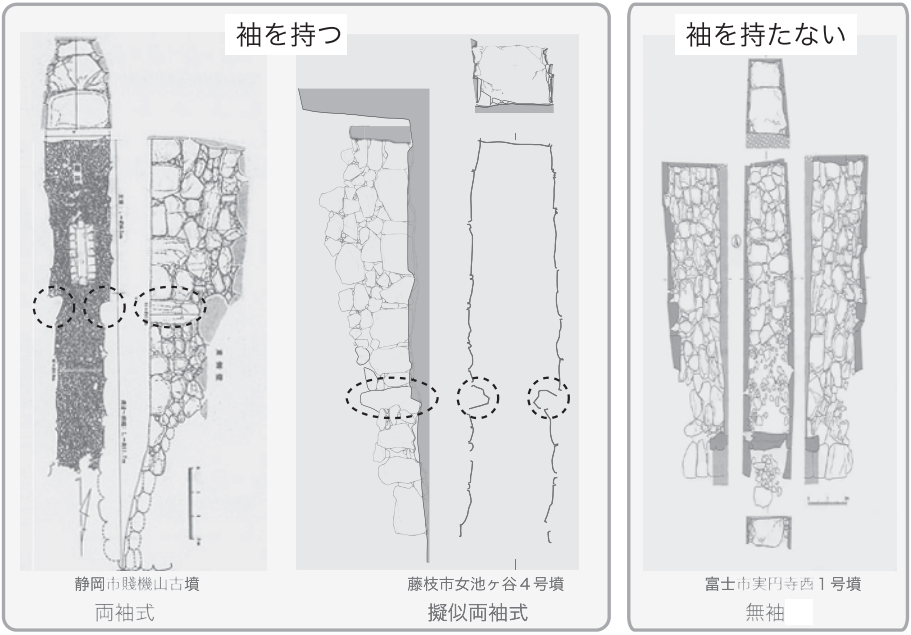


図15　袖を持つ石室と持たない石室

図15は左から賤機山古墳、藤枝市の女池ヶ谷四号墳、富士市の実円寺西一号墳の横穴式石室の実測図です。それぞれ、両袖式、擬似両袖式、無袖の代表的な石室といえます。

両袖式の賤機山古墳、擬似両袖式の女池ヶ谷四号墳は、破線円で囲った範囲が「袖」にあたります。賤機山古墳は平面図で見ると羨道と玄室の境に屈曲する部位があり、側壁にも立柱石が据えられ玄室と羨道を区分しています。女池ヶ谷四号墳は平面図を見る限り羨道幅と玄室幅に差はありませんが、側壁図には立柱石があり、立柱石が石室内にせり出すことで玄室と羨道を区分しています。いっぽう無袖の実円寺西一号墳には、平面図、側面図ともに袖に当たるものを看取することはできません。石室の形態別で見ると、駿河において数多く見られるのは、擬似両袖式と無袖です。

さて、先ほど、分類した四つの形態は「袖」の有無に着目すると、「袖」を持つものと持たないものに大別できます。そして、「袖」を持つものと持たないものの分布には特徴があります。

図に示した両袖式の賤機山古墳と擬似両袖式の女池ヶ谷四号墳はともに西駿河の古墳です。西駿河では両袖式や擬似両袖式に加え少数ながら片袖式も存在しており、西駿河

には「袖」を持つ古墳が分布することがいえます。いっぽう、無袖の実円寺西一号墳は東駿河の古墳です。実円寺西一号墳のような「袖」を持たない石室は、西駿河にも分布していることから、「袖」を持たない石室は駿河のほぼ全域に分布すると言えます。しかし、「袖」を持つ石室は、富士川流域から愛鷹山南麓には分布しません。いっぽうで、箱根西麓や伊豆西海岸には、極少数ですが袖を持つ石室が分布しています。

つまり、駿河――伊豆を含めますが――は、袖を持つ石室が分布する地域と分布しない地域に分けることができます（図16）。東駿河は無袖の石室が盛行する地域ということができます。

†床に段を持つ石室と持たない石室

「袖」の有無による地域色の他にも、地域的な特徴を示すものがあります。それは床面の構造です。

横穴式石室を縦に切って見た場合、床面が開口部から奥壁に至るまで、床面が平らなものと、床面に段差があり、玄室床面が開口部より一段低くなるものがあります。先ほど説明した「袖」を持つ石室は、全て床面が平らになりますが、無袖の石室には両者が見られます。

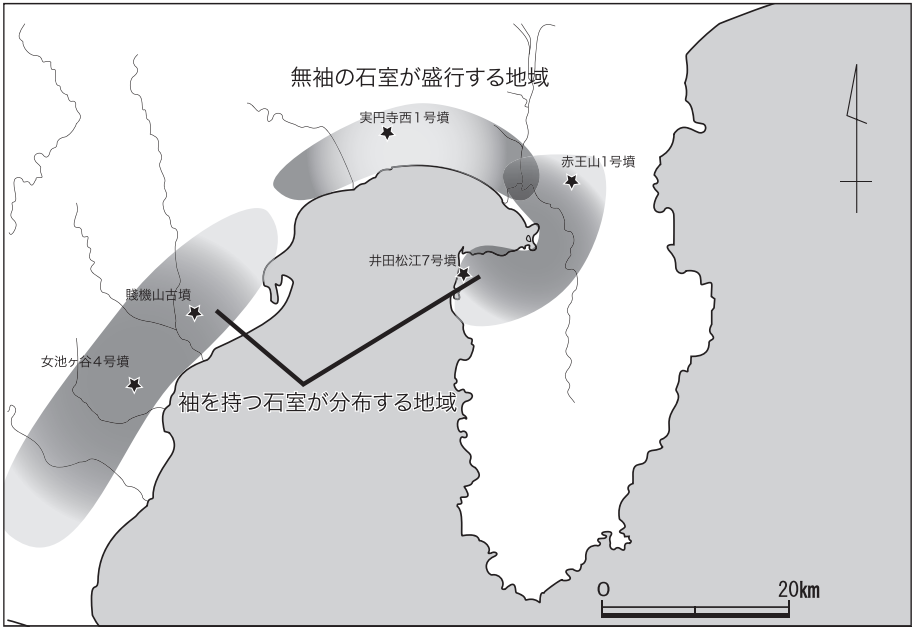


図16　袖を持つ石室の分布

図17に実測図を示した四基の石室のうち、実円寺西一号墳、富士市の中原四号墳、藤枝市の釣瓶落七号墳は、無袖の石室です。まず、実円寺西一号墳の石室の図面において破線で丸く囲った部分に注目して下さい。側壁の図には石室の縦断面が記されており、玄室床面に対し開口部の床面が一段高くなっている様子が表現されています。そしてその段差の部分には石室を横断するような石材が床に配置されていることが平面図から読み取れます。中原四号墳は、側壁の図からは読み取ることが難しいのですが、平面図では開口部側に石材が並べられている様子が表現されており、玄室床面が開口部より一段低くなっていることがうかがえます。

いっぽうで、同じ無袖の石室ですが、釣瓶落七号墳は、側壁の図に示された石室の縦断面には、玄室から羨道、開口部にむけて床面が緩やかに下っている様子は表現されていても、床面に段差の存在を見て取ることはできません。石室の平面図にも床面における造作は表現されていません。

なお、両袖式の賤機山古墳も実測図には床面の造作の表現はなく、玄室から開口部に至るまで、床面がほぼ水平になっています。駿河における「袖」を持つ石室は、床面に段差を持つことはなく、賤機山古墳の様に玄室から開口部まで水平か、ごく緩やかに開口部にむけ下る程度です。

さて、この床面における段差の有無ですが、分布に偏りがあることが特徴といえます（図18）。実円寺西一号墳、中原四号墳に代表される「段」を持つ床面の石室は、富士川流域以東、境川以西に分布がほぼ限られます。いっぽう、床面に「段」を持たない石室は駿河・伊豆の全域に分布し

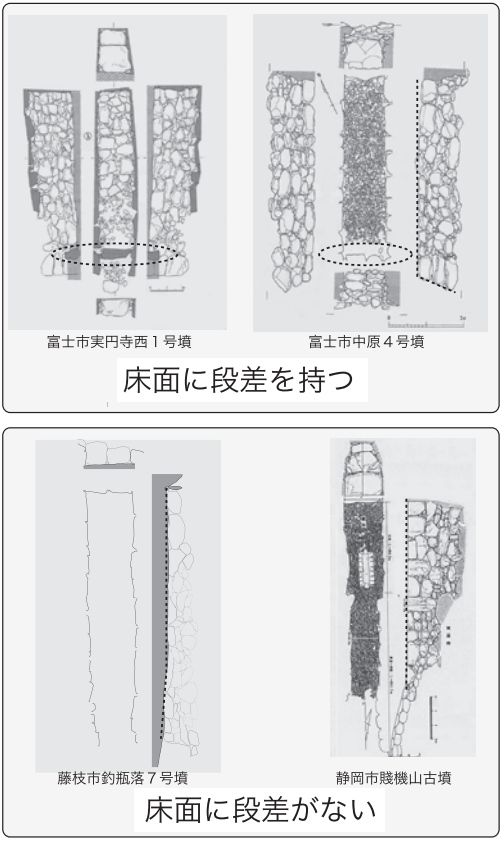


図17　床面の違い

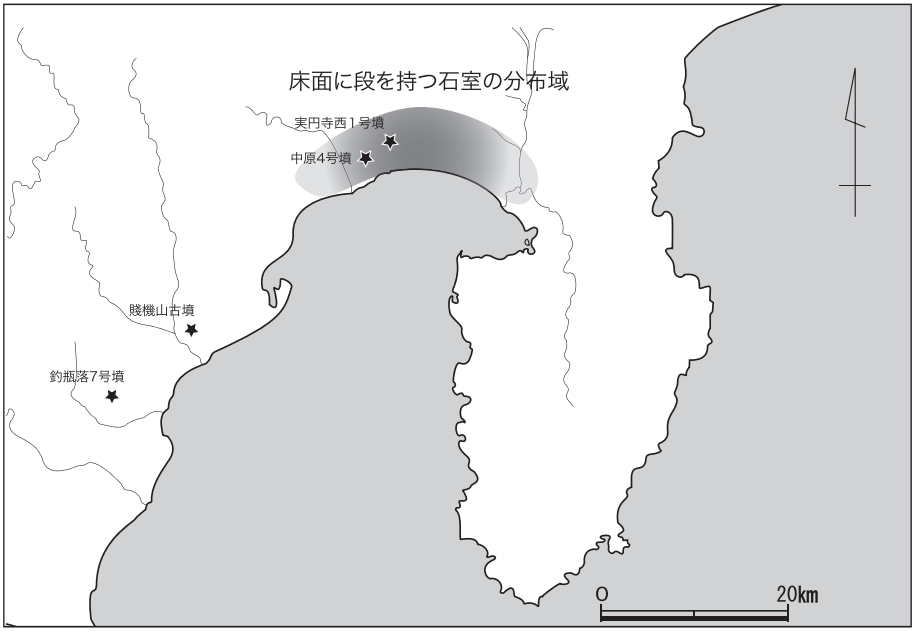


図18　床面に段を持つ石室の分布

ます。つまり、駿河・伊豆における横穴式石室の床面の構造には地域差があるといえ、床面に段を持つ石室の存在は東駿河における石室の特徴といえます。

†石室築造方法の違い

次に、もう一つ東駿河における横穴式石室の地域性をうかがえる特徴をあげたいと思います。それは、石室の裏込めです。いままでの説明にはない言葉なので、簡単に説明しておきますが、「裏込」とは、横穴式石室の奥壁の石材や側壁の石材と墳丘の盛土との隙間に詰め込まれる土砂や石です。古墳とその埋葬施設である横穴式石室を造る過程で、横穴式石室の側壁の石材や奥壁の石材を並べ積んでいきますが、その際、側壁の石材や奥壁の石材の石室内部からみた反対側、墳丘の盛土との隙間には空隙が生じてしまうので、この部分には何かしらのものを入れる必要があります。言葉で説明しても、わかりにくいかとおもいますので、実際の古墳の写真をみてみましょう。

まず、図19は富士市の船津寺ノ上一号墳の石室です。写真中央の縦長の長方形の部分が横穴式石室の玄室にあたる部分です。長方形部分を取り囲む白い物は石室の石材です。長方形部分の左右に整然と並ぶのが側壁にあたります。そ

図19　船津寺ノ上一号墳の石室と裏込め

図20　虎杖原古墳の石室と裏込め

図21　小鹿掘ノ内山一号墳の石室と墳丘

してそのさらに外側の黒い部分が墳丘の土にあたります。ここで注目してほしいのは、側壁と墳丘の間です。墳丘との間には側壁以外の石材が多数存在する様子がうかがえるかと思います。これが裏込めに使用されている石材です。この古墳は石室の裏込めに石材が多用されている例といえます。

図20は、沼津市の虎杖原古墳ですがこの古墳も、石室の裏込めに石材が多用されている例です。

いっぽうで、図21の静岡市の小鹿堀ノ内山一号墳の古墳横断面の写真を見て下さい。古墳を輪切りにしている珍しい写真ですが、中央部に見えるのが横穴式石室です。石室の側壁の外側に注目して下さい。側壁の石材と古墳の墳丘の盛土の間には、側壁の石材以外の石材をみることはできません。この古墳では、石室の裏込に石材は使われていません。

このように石室の裏込めには、石材が多用されるものと、ほとんど石材が使用されないものが存在します。そして、この裏込めにおける石材の使用状況にも地域差があります。

船津寺ノ上一号墳は富士市の古墳、虎杖原古墳は沼津市の古墳です。ともに、東駿河の古墳です。いっぽう、小鹿堀ノ内山一号墳は静岡市の古墳です。実は、駿河・伊豆の

全域で見られるのは小鹿堀ノ内山一号墳のような、裏込めに石材をほとんど使用しないタイプです。石材を多用する船津寺ノ上一号墳や虎杖原古墳の様なタイプは駿河・伊豆――静岡県内といってもいいですが――では、東駿河に分布が限られます（図22）

†東駿河の横穴式石室の特徴

以上、横穴式石室について「袖の有無」、「床面の構造」、「裏込めの状況」という三つの観点から、お話をしてきましたが、いずれの観点においても、特色を持つ地域をあげることができました。それが、今回のタイトルにある「東駿河」の地域です。それでは、東駿河の特徴を両隣の西駿河や伊豆と対比させてまとめてみましょう。まず、石室の平面形で見ると、東駿河は袖を持たない無袖の石室が石室形態の主体となる地域ですが、西駿河や伊豆には無袖の石室とともに袖を持つ石室が分布しています。次に床面の構造としては、東駿河は玄室床面が開口部より一段低くなる石室が分布しますが、その他の地域には分布しません。そして、古墳の構造としては、東駿河には裏込めに石材を多用する石室が存在しますが、西駿河や伊豆には見られません。無袖が盛行し床面に段を持つ石室や裏込めに礫を多用する

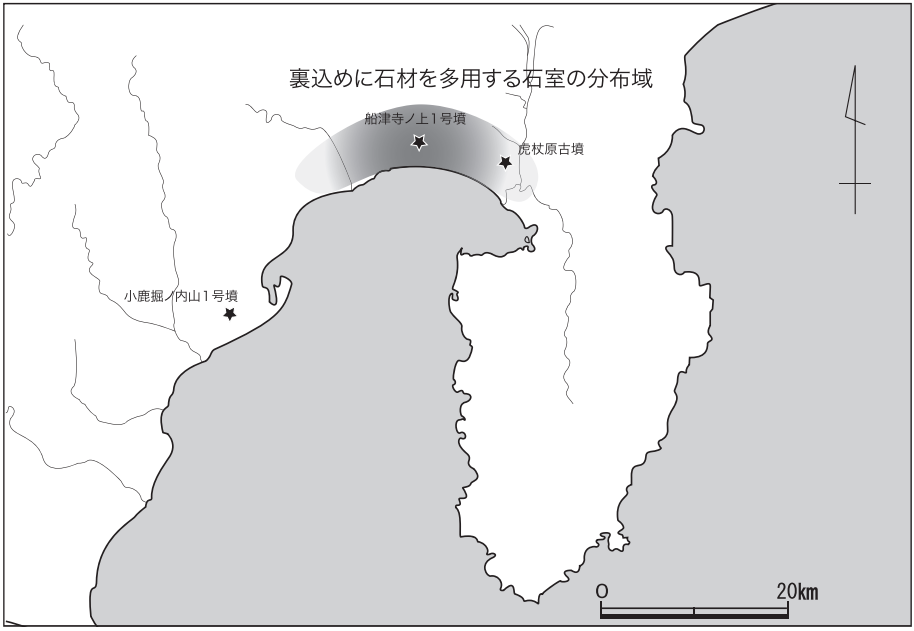


図22　石材多用裏込の石室の分布

石室が存在する地域が東駿河といえます。

†伊豆の横穴

さて、これまで横穴式石室の特徴から東駿河の特色を見てきましたが、横穴系の埋葬施設としては横穴も東駿河の東端部から伊豆にかけて存在します。そこで、次に横穴についても見てみましょう。

横穴は先ほどまで説明をしていた横穴式石室のように石材を積み上げて埋葬空間を作るものではなく、山肌の垂直に近い様な斜面を水平方向に掘削して埋葬空間を作り出しています。静岡県では北伊豆一帯の他、東遠江に多く分布し、限定的ですが静岡市にも存在します。なお、沼津市の江の浦や香貫山・徳倉山周辺にも横穴は存在します。この一帯は東駿河の一部といえますが、ここではこの地域の横穴も便宜的に「伊豆の横穴」として以下の話を進めます

横穴は急斜面を掘削し空間を作りだすため、地質的な制約も受けます。軟弱な地層や硬質の岩盤では横穴を穿つことはできません。ある程度の強度と掘り安さを兼ね備えた地質が求められます。分布に偏りがあるのは、地質的な制約とも理解することができますが、横穴を造りえる地層が露頭しているにも関わらず、横穴式石室が造られている場合もあるので、一概に地理的要因が横穴の分布を左右しているとは言い切れません。なお、伊豆の横穴の多くは、箱根新規軽石流と呼ばれる地層と凝灰岩層に造られます。

具体例をみてみますと、三島市の南東部から函南町にかけては、箱根新規軽石流に横穴が造られます。函南町の柏谷横穴群はその代表例です（図23）。いっぽう、沼津市の江の浦一帯から伊豆の国市においては、凝灰岩を掘削して横穴が造られています。伊豆の国市の大北横穴群はその代表

図23　柏谷横穴群

図24　大北横穴群

図26　宗光寺三号横穴

図25　大北一号横穴

図28　大師一号横穴

図27　大北三二号横穴

例といえます（図24）。この様な地層が露頭する斜面に、伊豆の横穴は造られます。なお、この二つの横穴群はともに国の指定史跡となっており、この地域を代表する横穴群です。

さて、次に伊豆の横穴の特徴を見てみましょう。まず、注目したいのは築造のピークです。伊豆では横穴式石室とほぼ同じか僅かに遅れて横穴の築造が開始されます。ともに七世紀代を通じて造営がされますが、横穴式石室は七世紀の前葉～中葉が築造のピークといえます。いっぽう、横穴群の形成がピークを迎えるのは、七世紀中葉以降のことで、八世紀前半まで多数の横穴が造られます。横穴は横穴式石室にくらべ造営のピークが遅れることが特徴の一つと言えます。

次に注目したいのは形態です。伊豆において一般的といえる横穴の形状としては、開口部が角張ったアーチ状の形態で、床面には造作がなく、内部に石櫃とよばれる火葬骨の埋納容器や石棺がないタイプです（図25）。しかし、中には開口部が二段構造になり床面に段差を持つもの（図26）や、開口部が方形のもの（図27）、内部に石棺や（図28）石櫃を持つ横

図29 「若舎人」銘石櫃

穴もあります。なお、大北三四号横穴で発見された石櫃は「若舎人」と陰刻されており、静岡県を代表する考古資料の一つとなっています（図29）。

このように様々な形態の横穴が同一群中に見られることは、伊豆の――特に伊豆の国市の――横穴群の特徴といえます。なお、ほかとは異なった特徴を持つ横穴は、概して比較的規模の大きな横穴や群の中心を占める横穴などで見られる傾向があります。これらの横穴の被葬者は、群中のほかの横穴の被葬者とは違った存在であることを意識していたのかもしれません。

†東駿河の埋葬施設

以上、古墳時代後期における駿河や伊豆の埋葬施設について概観しましたが、その中で東駿河は西駿河や伊豆とは違った特徴を持つ埋葬施設が存在することがわかっていただけたでしょうか。

あらためてまとめると、まず、東駿河は横穴式石室が埋葬施設の主流となる点で、横穴が盛行する伊豆とは異なる傾向をもつと指摘できます。そして、横穴式石室が主流となる点は西駿河と共通しますが、東駿河には西駿河で見られる「袖」を持つ石室が存在しないいっぽうで、西駿河にはない床面に段を持つ石室や石材多用の裏込めを持つ石室が存在するなど、石室の形態や構造が西駿河と東駿河では異なります。図30で説明すると、図のうち①とした範囲は横穴が主流となる地域、②と③は横穴式石室が主流となる地域になります。このうち、③の地域は袖を持つ石室が存在し、②の地域は無袖が主流であるとともに、石材を裏込めに使用する石室や玄室床面が一段低くなる石室が存在する地域です。

このように、東駿河は東西に隣接する地域とは埋葬施設の特徴が異なり、独自色を持った地域といえます。もっとも、両地域と接する縁辺部においては、隣接地の影響を受けた埋葬施設が存在しており、多分に漸移的な地域色といえます。

ところで、このような東駿河、西駿河、伊豆の各地における埋葬施設の地域色は、どのような経緯で生じたのでしょうか。その要因の一つとして考えられるのは、各地におけ

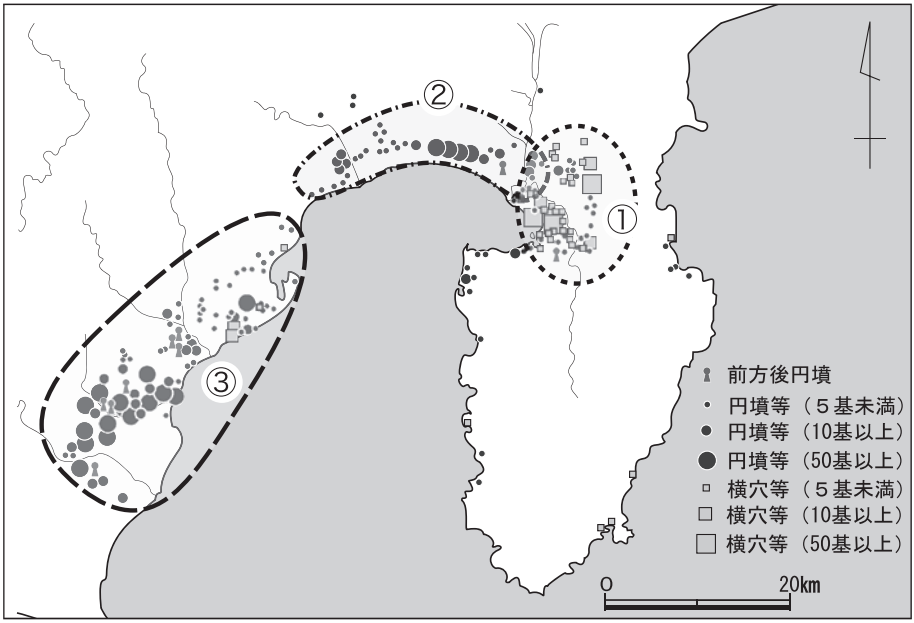


図30　埋葬施設に見られる地域色

る埋葬施設の導入経緯の違いです。横穴と横穴式石室では横穴系であることは共通しても、構築方法が全く異なることから、別系統の墓制であることは理解しやすいかと思います。

いっぽう横穴式石室については、一見するとわかりにくいかと思います。しかし、先ほどまで見たように、横穴式石室には各部の構造や形態が異なるものが存在することは事実です。そして、この各部の違いは系譜の差によるものと考えられています。

駿河を含めた東海地方には幾つかの系譜が異なる横穴式石室が存在することが知られています。代表的なものとしては、「畿内系」の石室、「東海系（三河系）」の石室があり、少数ですが「北部九州系」の石室の存在も知られています。

このうち、西駿河で見られる「袖」を持つ石室は「畿内系」あるいは「東海系」の石室になります。そして、西駿河における無袖の石室の多くは、東海系の石室の退化形態と捉えることができます。なお、「畿内系」の石室とは畿内中心部における王墓などの石室と形態的特徴が類似するもので、駿河では賤機山古墳の石室が該当し、畿内との関係によりこの地域にもたらされた形態といえます。「東海系」の石室は三河に起源を持つ石室で、三河や遠江などとの交流によ

り、駿河にもたらされた形態です。

つまり、西駿河においては、畿内や三河・遠江との交流により横穴式石室が導入されたといえます。いっぽうの東駿河においては、畿内や三河・遠江、そして西駿河ではなく、別の地域との交流のもと横穴式石室を導入したといえます。ただし、現在の研究の成果ではまだ、東駿河における石室の原型がどこにあるのかは、定見をえていません。なお、東駿河は当時の大和王権や近接地から等閑視されていた地域のように捉える方もいるかもしれませんが、東駿河には西駿河の石室と比較しても遜色ない規模を持つ石室が存在したり、限られた被葬者のみが保有する装飾付大刀や馬具などを持つ石室が少なからず存在します。東駿河の人々の勢力が劣っていたり、他地域と全くの交流がなかったというわけではありません。また、埋葬施設の系譜が異なるからといって、古墳時代後期において、東駿河と西駿河、伊豆のそれぞれが全く交流をもっていなかったわけではありません。そこで次に、別の考古資料から地域の交流を考えてみたいと思います。

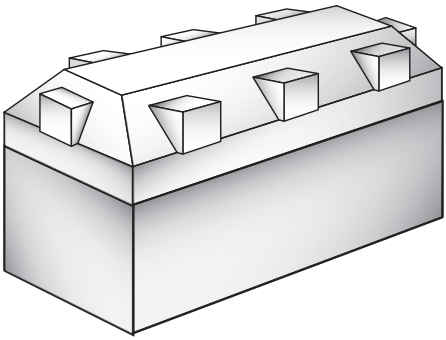


図31　家形石棺

海を越えて

†家形石棺と伊豆の凝灰岩

さて、静岡県の地図をみると、静岡県は伊豆半島と御前崎により駿河湾を抱いているようにみることもできます。特に西駿河と伊豆は、駿河湾により隔てられた地域のように感じられるかもしれません。しかし、古墳時代後期においては、海が地域を隔てていたとはいい切れないようです。今回は会場が海に近いこともあるので、海に関わる地域交流を考えてみたいと思います。そこで注目したい二つの考古資料があります。

まず、一つ目が「家形石棺」と呼ばれる「棺」です。古墳に死者を葬る際にはさまざまな「棺」が使用されますが、「棺」は素材や形状により分類することが可能です。その一つに「家形石棺」があります。「家形石棺」というのは、石で造られた家のような形をした「棺」です（図31）。

冒頭で静岡県における古墳時代後期の代表的古墳として紹介した静岡市の賤機山古墳は、埋葬施設である石室の中に「家形石棺」を持ちます（図32）。この家形石棺は大きな石材から削り出し家の形に整え、死者を納める場所を刳り抜いて造っている棺なので、刳抜式の石棺とも呼ばれます。

そして、賤機山古墳の石棺の石材は、伊豆の凝灰岩といわれています。このような伊豆の凝灰岩を使用した家形石棺・刳抜式の石棺は、賤機山古墳以外でも見つかっています。その分布域は図33で示したとおり、静岡市と東駿河の東端部から伊豆にかけてです。東駿河東端部や伊豆の凝灰岩製の石棺の中には、時期や形態的特徴が賤機山古墳の石棺と異なるものもありますが、長泉町原分古墳のように賤機山古墳の石棺との関連をうかがえる資料もあります。

図32　賤機山古墳の石棺

先ほど、横穴の説明の時にも少しふれましたが、沼津市の江の浦周辺から伊豆の国市一帯にかけては、凝灰岩が露頭しております（図34）。賤機山古墳等の静岡市の石棺は、こういった場所で石材を採取し、静岡まで運ばれたことになりますが、何トンもある石材を陸路で運んだとは考えがたく、海を越えて運ばれていったものと考えられます。東駿河や伊豆における凝灰岩製の石棺の中には、賤機山古墳の石棺の石材を採取・運搬の過程で関与した人物に関わるものがあると考えたいです。

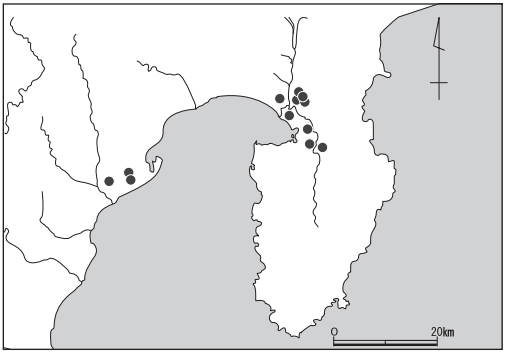


図33　賤機山古墳の石棺

図34　露頭する凝灰岩（沼津市口野）

なお、駿河においては、家形石棺の他に「組合式箱形石棺」と呼ばれる複数の板状の石材を直方体状に組み上げて棺としているものもあります。組合式箱形石棺は静岡市周辺から愛鷹山南麓、箱根西麓、伊豆半島の古墳で多くみつかります。

つまり、西駿河と東駿河、伊豆の横穴式石室においては、石室の中に死者を納めるにあたって、組合式箱形石棺という棺を用いる場合があるという共通性を持ち、さらに、西駿河、なかでも静岡市周辺は東駿河東端部や伊豆とは凝灰岩製の石棺の使用という点で結びつきを持っているといえます。

†駿東型の甕

次に注目したいのは、「駿東型の甕」とよばれる土器です。古墳時代後期には、「土師器」とよばれる素焼きの土器と、「須恵器」とよばれる窯で焼いた土器の二種類が存在していますが、ここで取り上げる「駿東型の甕」は土師器の甕になります。なお、「駿東型の甕」は「駿東甕」と略称される場合もあります。

さて、「駿東型の甕」は、どのような甕かというと、丸い胴部を持ち、その表面は、刷毛で調整するため細かな線が見られ、口縁部――土器の縁の部分ですが――が厚みを持ち、平底の底面には、木葉痕――葉っぱの葉脈の痕――がある土器です（図35）。なお、この時期、周辺の地域で見られる土師器の甕は胴が細長く、口縁部が厚くならないものが一般的です。

また、「駿東型の甕」は「駿東」と名が付きますが、西駿河や遠江の東部で

図35　駿東型の甕

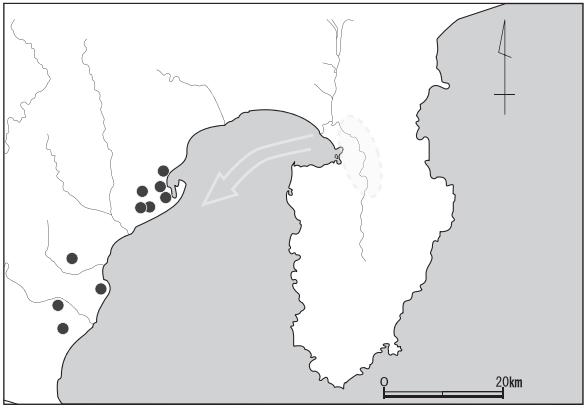


図36　西駿河の駿東型の甕

も出土が報告されています。特に西駿河においては一定の出土量があるため（図36）、「駿東型」ではなく、「駿河型の甕」と呼ぶのがふさわしいと指摘する研究者もいます。

ここで注目したいのは、この西駿河で出土した駿東型の甕です。土器は、その素材となる土に含まれている鉱物等を分析することで、何処の土を使って造られた土器か調べることができます。藤枝市や焼津市で出土した駿東型の甕の土を調べたところ、伊豆半島――狩野川流域――の土が使用されるという結果が出たものがあります。土器の素材となる土そのものが運ばれて、西駿河で土器が焼かれたと考えることもできますが、おそらく伊豆で造られた土器が運ばれたものでしょう。そして、土器の様な大きくかさばるものが多数運ばれたことを考えると、その運搬は陸路よりも海路であったと考えられます。もっとも、「土器」そのものが運ばれたのではなく、土器の中に何かを入れて運んだのかもしれません。

なお、このほかにも海を媒体とした交流をうかがえる資料が見つかりことがあります。その中で注目できるのは、伊豆の海岸に点在する古墳群です。沼津市の井田松江古墳郡の古墳から出土した鉄鏃――鉄製のヤジリ――の中には、駿河や遠江では一般的に見られるものと異なる形態のものもあり、同じく伊豆の西海岸にある沼津市の平沢古墳群から出土した、弓矢の矢を射れるコロクと呼ばれる容器に使用される飾り金具は遠く九州福岡の沖ノ島の遺跡から出土した資料と似ているなど、伊豆の海岸部の古墳の被葬者は海を舞台とした広域にわたる交流範囲をもっていたことがうかがえます。また、「洞穴墓」という自然にできた洞窟や岩陰を埋葬に利用したものもあります。「洞穴墓」が見られる地域は限られており、太平洋岸では、紀伊半島や三浦半島、房総半島に見られる程度です。これも立地や分布から海を介した交流が想定されるものです。

まとめ

以上、説明したように古墳時代後期における駿河・伊豆では、西駿河、東駿河、伊豆のそれぞれで古墳の主たる部位である埋葬施設の特徴が異なり、独自性を持っています。そのいっぽうで、埋葬施設に死者を埋葬するにあたって、石棺を使用する場合があるという共通性をもち、石棺の中には、海を越えて運ばれたと考えられるものもあるなど、海を媒介とした交流があったことをうかがえる事例もあります。

ところで、西駿河では賤機山古墳の様に畿内からの流れを汲む石室が存在し、伊豆ではいち早い火葬の導入や「若舎人」銘の石櫃が存在するなど、畿内との関連性がうかがえる考古資料が存在します。東駿河の埋葬施設からは一見すると畿内とのつながりは薄いように見えますが、飾り大刀の存在などから畿内とのつながりが全くなかったとはいえません。なお、西駿河に畿内系の石室が導入されるのは六世紀後半、東駿河で飾大刀が多く見られるのは七世紀代、そして伊豆で横穴の造営が盛んとなるのは七世紀後半で八世紀になると火葬が行われます。畿内との関連を窺わせる資料が時代を追って東に移っていくことは、駿河・伊豆に対する畿内からの働きかけが西から漸移的に東に移っていったことを物語るものなのかもしれません。そのいっぽうで、東駿河の埋葬施設には畿内からの影響がみられないことから、東駿河は西駿河や伊豆とは異なった扱われ方をされていた地域であったとも考えられます。

おわりに

以上、古墳時代後期における東駿河について、古墳の埋葬施設から見てきましたが、最後に、この地域の古墳のもう一つの特徴を紹介させて頂きます。

実は今回取り上げた古墳や横穴の多くは、現存し実見することができます。使用した写真の中にも、最近、現地に行って撮影したものが多くあります。

伊豆を代表する柏谷横穴群や大北横穴群は国指定史跡として整備されていますが、このほかにも横穴では宗光寺横穴群、横穴式石室を持つ平石四号墳、井田松江古墳群は前方後円墳の駒形一号墳は現存します。特に伊豆西海岸屈指のビューポイントである「煌めきの丘」の真下にある井田松江古墳群は、古墳の被葬者と海とのつながり、駿河湾を舞台とした古墳時代の人々の活躍を想像できる場所といえます（図37）。

図37　井田松江古墳と駿河湾

既にこれらの古墳をごらんになったことがある方も、もう一度、視点を変えてこれらの横穴や古墳を見ることで、新たな発見があるかもしれません。私自身も一回見た古墳や横穴でも、二回・三回と訪れるたびに、一回目に見た時には見落としていた新たな発見をすることがよくあります。

これらの古墳を残し伝えていくとともに、地域に残る活きた歴史財産として活用していくことは私たち文化財に関わる者の課題といえます。今回の私の発表を聞いて頂くなかで、地元に残る古墳や横穴を見に行ってみようと思う方が一人でもいれば幸いです。

図の出典

図3　『石川古墳群』沼津市教育委員会・中日本高速道路株式会社　二〇〇八
図7　『高田観音前一・二号墳発掘調査報告書』藤枝市教育委員会　二〇〇三
図8　『三池平古墳』庵原村教育委員会　一九六一
図9　『史跡賤機山古墳保存整備完成記念　甦る賤機山古墳』静岡市教育委員会　一九九七
図19　『船津寺ノ上第一号墳発掘調査報告書』富士市教育委員会　一九八七
図20　『寺林遺跡・虎杖原古墳』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　二〇〇三
図21　『駿河堀ノ内山古墳群』静岡市教育委員会一九六七
図29　『東駿河・伊豆の古墳と横穴墓』三島市郷土資料館　二〇〇六
図35　『星久保古墳群』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　二〇〇二

なお、図6及び図12については、『横穴式石室誕生　黄泉国の成立』大阪府立近つ飛鳥博物館　二〇〇七を基に作成した。